

No. 63

2007年3月発行

新潟県支部報

マスコープ

初冬の上越に訪れた珍客たち

上越市 金子俊彦



ハイイロヒレアシシギ 撮影日: 18年12月9日, 場所: 上越市大潟区朝日池

13羽の群は、この日の午後だけに姿を見せ、翌日にはどこを探してもその姿を見ることができませんでした。



シマアカモズ(アカモズの亜種)

撮影日: 平成18年11月19日

場 所: 上越市 (関川の河川敷)

発見者: 上越市 滝本要輔

平成18年11月6日滝本氏が発見してから、その後12月2日までの1ヶ月近く同じ場所で見られました。

日本では、南西諸島で旅鳥または冬鳥として渡来するそうですが、本州以北では日本海の離島で見られるほかに稀のようです。

市街地の鎮守の森で繁殖するアオバズク

上越市 後澤 正 知

《はじめに》

アオバズクは、平地の社寺林などにもよく営巣すること知られている。遠く中国南部や東南アジアから、青葉の季節に渡ってくる夏鳥で、これがアオバズクの名の由来である。

1995年から上越市の市街地、稲田一丁目の諏訪神社でアオバズクの観察を2006年まで行ったので、その生態について紹介したい。

《諏訪神社の環境》

境内の広さは1,964㎡で、境内にはアオバズクの営巣木として2本のケヤキがある。ケヤキ(A)は御神木で境内の中央にあり樹齢800年、幹回り6m、木の高さ25m、枝張り40mで境内を覆っている(図-1)。ケヤキ(B)は、ケヤキ(A)の西北8mに位置しており、幹回りは4.2mである。

この2本のケヤキはともに樹勢の衰えが目立つ。特にケヤキ(B)は腐朽が進み、切り詰められた寸胴の幹は高さ14mほどで、枝も細く短いものが疎らについている。ケヤキ(A)は、2002年上越市の文化財(天然記念物)に指定されてから保護が進み、樹勢を戻しつつある。



図-1-1, 1998年10月



図-1-2, 2001年10月

稲田小学校構内の観察ポイントから、南方向の営巣木ケヤキ(A)を見る。

境内の縁には境内を取り囲むように、イチヨウ2本(1本は幹回り3.1mの大木)、営巣木以外のケヤキ3本、スギ6本、ドイツトウヒ1本、ウラジロガシ3本の15本が生育している。また参道には幹回り3.5mのモミの大木1本、アカマツ2本、スギ11本、その他の針葉樹11本の25本が、社務所の裏にはスギ9本がそれぞれ生育している。

これらの樹木はほとんどが直径50cm～70cm、高さ15m～25mほどである。このほかに常緑および落葉広葉樹の亜高木も所どころに見られ、こんもりした鎮守の森の景観を呈している。境内の北側は稲田小学校、東西及び南側は住宅地で、西側120mには一級河川関川が北に向かって流れている(図-3)。

《観察環境》

観察はおもに北側の稲田小学校構内の方向から行った。この位置はアオバズクが営巣する樹洞の入口がよく見え、境内全般も見渡せる(図-1)。境内を照らす明かりは、稲田小学校の構内で境内から北東24mの位置に、23時15分消灯する水銀灯が1基、境内に街灯2箇所、神社本殿の向拝軒下に電灯が1箇所ついている。これらに加えて街明かりも入り込み、境内はかなり明るい。

このような環境でアオバズクの行動を、明るい空間に映して観察することができた。また抱卵に入るまでのねぐらは、ほぼきまった場所であり。そして雛が巣立ちするまでの期間、境内での活動時に止まる枝は、樹冠先端部で限られた数箇所の枯れ枝を利用するので観察しやすかった。

付表 1

12年間におけるアオバズクの生態

歴年 生態		1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
1	初認							5/1					
2	初鳴き (鳴き始めた時刻)			5/1 (19:12)	4/29 (19:10)		5/4 (19:15)	5/5 (19:31)	4/26 (19:15)	4/27 (19:13)	4/26 (19:23)	4/27 (19:24)	4/29 (19:33)
3	つがい形成		5/10	6/2	5/6		5/7	5/9	5/2	5/4	5/18	5/14	5/6
4	巣立ち (巣立ちした時刻)	7.23 2羽 7.25 1羽 7.26 1羽 (19:34)	7.22 1羽 (19:20) 7.23 1羽 7.24 2羽		7.19 2羽	7.26 1羽 7.28 2羽	8.12 1羽	7.20 2羽	7.18 2羽 7.19 1羽	7.21 1羽 (19:08) 7.22 1羽 (19:21) 7.23 1羽 (19:25)	8.7 3羽 1羽目 (19:24) 2,3羽目 (19:29) (19:42)		
	日の入り	19:03	19:03							19:04	18:48		
5	巣立ち数	4羽	4羽		2羽	3羽	1羽	2羽	3羽	3羽	3羽		
6	南への渡り		10/1	9/30					9/19	9/27			
7	アブラゼミ初鳴き 〔高田測候所の 季節観測による。〕	7/13	7/13	7/13	7/3	7/9	7/3	7/2	7/3	6/30	6/29	6/29	7/8
備 考		1. 1997年、2005年のつがいは、営巣樹洞の決定までいたったが繁殖しなかった。 2. 1997年のつがいは繁殖しなかったが、9月30日南への渡りの日まで諏訪神社の境内で過ごした。 3. 2000年は、抱卵直前に巣穴の枝が幹付近から折れて落下し、営巣樹洞を換えたので巣立ちが遅れた。 4. 2006年のつがいは、ケヤキ(A)の枝(ウ)でチョウゲンボウが営巣したため、5月13日に他所へ移っていった。											

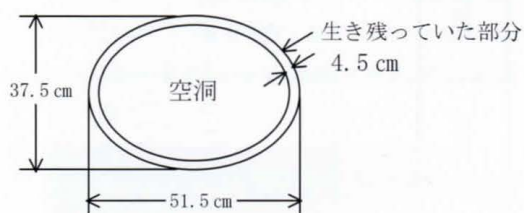
付表2 アオバズクが営巣した樹洞の状況

営巣した木と樹洞の部位		樹洞の高さと向き	営巣した年	営巣回数	備 考
ケヤキ (A)	枝 (ア)	約 13m 東向き	1995 年～2000 年	6 回	この枝は2000 年 6 月 8 日に幹の近くから折れて落下した。 (図-4、5)
	枝 (イ)	約 13.5m 南向き	2000 年	1 回	この樹洞は(ア)の枝が折れて落下したために利用した。
	枝 (ウ)	約 15m 東向き	2001 年、2003 年 2005 年、(2006 年)	4 回	2006 年は、この樹洞を利用しようとしたが、チョウゲンボウに占領されて利用できなかった。
	幹 (エ)	約 9.5m 北東向き	2004 年	1 回	
ケヤキ (B)	幹 (オ)	約 16m 東向き	2002 年	1 回	このケヤキの幹は、樹洞周囲の腐朽がひどく、2003 年に樹洞部分を含めて上部が切り取られた。
備 考		1. 2006 年に現存している樹洞は、(イ)(ウ)(エ)の 3 箇所である。 2. (ウ)の枝も腐朽が進み、巣穴から1.6mほど上で先端部を切り詰めた跡を見ると、空洞化は非常に進んでいる。			

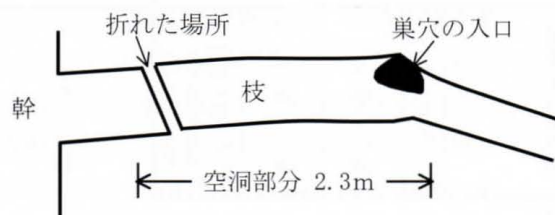


地上に落下した枝の様子

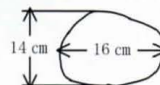
枝の全長 13m
 空洞部分の長さ 2.3m
 枝(空洞)の断面



落下前の枝の概観図



巣穴入口の大きさ



枝は巣穴の入口までおおむね水平

図2 2000 年 6 月 8 日に落下したケヤキ(A)枝(ア)の状況

《繁殖活動の概要と諸段階》

繁殖活動は次の様な段階に区分できる。渡来・初鳴き、つがい形成、交尾・求愛給餌、営巣樹洞（巣穴）の選定、産卵・抱卵、孵化・樹洞内育雛、巣立ち、巣立ち雛の育雛・家族生活、南への渡り。一連の繁殖活動は4月下旬に始まり、10月上旬に終わる。以下、各段階について記す。



図-3, 2003年6月 関川左岸堤防上から見る鎮守の森と周辺の環境（左が北方向）

《渡来・初鳴き》

アオバズクの観察は初鳴きから始まる。一番早い初鳴きは4月26日で、遅かったのは5月5日であった。初鳴きの状況は4月26日、4月27日、4月29日がそれぞれ2回で、5月1日、5月4日、5月5日がそれぞれ1回であった（付表-1）。したがって、アオバズクが当地に渡ってくるのは4月下旬頃からである。ただし、2001年には、5月1日にケヤキ(A)の枝から枝へ移り飛ぶアオバズクを観察し、4日後の5月5日に初鳴きがあったので、営巣樹洞の状態を十分に調べてから鳴き始めるものと思われる。

《つがい形成》

4月下旬から5月上旬頃の日のは入りは18時36分前後で、雄は辺りが暗くなった19時10分頃から、境内の高くて見通しのきく木の頭で「ホッホー、ホッホー」という二声づつの高い音色の鳴き声で、つがいの相手を呼ぶようになる。この時、喉を風船のようにふくらませて鳴いている。高い所で鳴くので、この声は300mほど離れていても聞こえてくる。

つがいの相手を呼ぶ鳴き方の例：2004年5月12日に観察した状況は天候晴れ、月齢22.6、日のは入り18時46分、翌日の日のは出4時40分。12日19時04分に鳴き始めて、翌朝3時56分に鳴き止んだ。この間、鳴いていた時間は5時間32分、鳴き止んでいた時間は3時間20分であった。その時の状況で、このように一生懸命に鳴く日と、鳴くのが少ない日とがある。

つがいの形成は5月上旬が6回、5月中旬が3回、6月上旬が1回であった（図-4、付表-1）。



図-4, 2001年5月21日 地上2mほどの高さの枝に止まるつがい。つがい形成すると、しばらくの間、このように低い所にねぐらをとるようになる。

雌雄出合いの例：2004年5月1日にケヤキ(A)で観察した状況は天候晴れ、月齢11.6、21時50分に雄の行動に変化が表れた。鳴く場所を頻繁に変え、ホッホー、ホッホーの鳴き声はだんだん、だんだんやさしく小さな声に変っていき、明らかに雌が近寄ってきたことが感じ取れた。このような行動を繰り返し、実に3時間36分が経過した翌日の1時26分に、ようやく出合いにいたり雌雄が接触したが、この時にはつがいになれなかった。この年のつがい形成は5月18日になった。

《交尾・求愛給餌》

つがい形成されてからは、夜の活動開始が少し早まった。日のは入りが過ぎ、辺りが薄暗くなる前である。先づねぐらから雄が飛び立ち、横に張り出したやや太い枯れ枝に止ま

る。しばらくすると雌が飛び立って、雄の横または近くの枝に止まると交尾をする。この時、雌か雄のどちらかか、あるいは雌雄ともにか「クウ、クウ、クウ」と低くよく通る声で鳴く。交尾をする枯れ枝はほぼきまっています、2～3箇所の枝を利用した。

縄張りの広さは境内を中心に半径 250m ほどの範囲である。縄張りに侵入してくる相手には、甲高く激しく鳴いて縄張りの外まで追い立てる。雌雄は境内および縄張りの中を飛び回りながら時々求愛給餌を行なう。雄は餌を食いちぎって、口移しで雌に与えたり。時には餌を裂いてから雌に渡したりする。餌はコウモリがほとんどのようであった。ペリットの内容物をみても小鳥の骨は見当たらなかった。

《営巣樹洞（巣穴）の選定》

営巣に適した樹洞はケヤキ (A) に 4 箇所、ケヤキ (B) に 1 箇所の 5 箇所あった（付表-2）。雌雄は交尾が終わると、これらの樹洞の中から営巣する樹洞選びを始める。

その際、雄が雌を巣穴に誘導するため、樹洞の入口で体を外側に向け、速いテンポの非常に低い声で「ホッホッホッホッホッ」と連続して鳴き続ける。この声は日を迫って長く、深く、内容の濃いものになっていく。この時、雌はこの樹洞近くの枝に止まっていて、澄んだ小さな声で「ホッホ、ホッホ」と雄に答えている。やがて雄が鳴き止み樹洞の入口から離れると、雌が交代して樹洞の中に入る。このような行動を雄が主導して何日間か 15 分ほど繰り返す。雌の気に入りの巣穴がきまるのに、最初の樹洞で決まる場合と複数の中から選ぶ場合がある。2004 年には、一度決まったのを途中で換えたことがあった。営巣できる樹洞が、2006 年には 3 箇所にまで減ってしまった（付表-2）。

《良い樹洞の条件》

アオバズクが利用する樹洞には、利用の頻度に片寄りが見られ、その状況は付表-2のとおりであった。

好んで営巣した樹洞の例：ケヤキ (A) のほ

ぼ水平に伸びた枝 (ア) の樹洞は 6 年連続で利用した。ところが、この枝は 2000 年 6 月 8 日に幹の近くから折れて地上に落下してしまった（図-2,5）。枝を見ると空洞部分の長さ



さは 2.3m ある。さらに空洞の中には、さらさらとしたおが屑状の木屑や落葉などがかなりの量入っていた。アオバズクは

図-5, 2000 年 6 月 8 日、地上に落下したケヤキ (A) の枝 (ア) の様子。空洞の中に堆積していたかなりの量の、おが屑状の木屑や落葉などが地上に散乱している。

自分では巣材を運び込まないので、雌はそこにくぼみ（産座）を作って抱卵することができる。また空洞内の広い空間とあいまって、孵化した雛は糞で汚れたりすることがないので、このような条件の樹洞が良い巣穴なのである。次いで利用が高い枝 (ウ) も空洞化が進んでおり、外見からもこの条件を満たしていることがうかがえる（図-6）。（以下、次号に続く）



図-6, 2006 年 6 月 ケヤキ (A) の枝 (ウ) の様子。腐朽が進み樹洞入口下側付近の樹皮に、枝先に向かって長い亀裂が入っている。

ハクガンの青色型（アオハクガン）の渡来

新潟市 木下 徹

はじめに

ハクガンは北アメリカ大陸の北極海沿岸やグリーンランド、ロシアの北東部チュコト半島の北極海に浮かぶウランゲリ島で数万羽のコロニーで繁殖していることが知られている。アメリカ大陸北西側には亜種ハクガンが、北東側には身体の少し大きい亜種オオハクガンが繁殖しているという。これらのハクガンは主に北アメリカ大陸に越冬のため渡来し、アジアに渡るものは希である。県内では毎年ハクガン数羽の渡来が話題になるがこの冬、それに輪をかけて珍しいハクガンの青色型「アオハクガン」が渡来したので概略を紹介したい。アオハクガンはハクガンの色違いであり、種を分けるものでも亜種でもない。種としてはあくまでハクガンである。

新潟県内での観察

県内での初認は11月2日、瓢湖周辺の水田で瓢湖管理事務所の熊島氏によるものである。色彩と姿から日本の図鑑に載っていない種不明のガン類と判断され、瓢湖の白鳥を守る会会長関川氏と共に観察され、その日の夜に関川氏から新潟県野鳥愛護会本間隆平会長に連絡された。翌3日に本間氏・山田清氏によりヒシクイとマガン各1羽とハクチョウの群れの中にあるこの鳥が観察され、ハクガンの青色型「アオハクガン」と同定された。その日の夕方には姿は見られず、約一週間後の11月9日、長岡科学博物館渡辺前館長により旧中之島町の水田でハクガンの幼鳥1羽とこのアオハクガンがコハクチョウ110羽の群れの中に採餌している姿が観察さ



れた。アオハクガンはこの地に1月15日までの約2ヶ月間をコハクチョウと共に過ごしたが、行動を共にするコハクチョウの家族群は確認できず、1月15日を最後に旧中之島から姿を消した。その後11日経過した1月26日に本会副支部長である岡田成弘氏により、鳥屋野潟湖内でコハクチョウの群1,000羽以上の中にいるアオハクガンを発見され、翌27日は副会長について行くように副会長自宅近くの水田で採餌している姿が観察されている。翌28日は新潟市民探鳥会が開催されているのを見計らったように佐潟に入り、飛び立ちまで姿を見せてくれた。2月7日が湿地センター佐藤氏による佐



潟での終認であるが、約1ヶ月後の3月1日、神林村のお墓場大池に現れたのを小田和久氏により確認された。ここでは3月23日までコハクチョウと行動を共にしていて、渡来当初から飛去までの行動は、小田氏により詳細に観察されている。

2羽のアオハクガン

このアオハクガンはインターネットによる情報によれば10月19日に山形県鶴岡市で観察された個体と酷似しており、同一個体の可能性が非常に高く、瓢湖で確認された11月3日には宮城県にも色合いの違う別個体が観察されており、今のところ日本に2羽の渡来が分かっている。本県に渡来したアオハクガンの色彩は首から下が暗青灰色で、アオハクガン成鳥と判断できる羽色をしている。一方、宮城県に渡来した個体は胸から腹まで白く、ハクガンとアオハクガンの中間型と思

われる。

また、過去の渡来については、北海道で1976年と1988年にそれぞれ1羽の渡来記録がある（strix 誌）。しかし、1976年の個体については高野氏によるとマガンの部分白化個体ではないかと記載されている。

ハクガンの生息状況

御存知の通り、江戸時代に多くのハクガンが日本に渡来していたようにアジアにハクガンを渡らせる計画として、日本・アメリカ・ロシアの研究者達の努力による1993年から行われているハクガンの復元計画がある。筆者は、今回の個体がこの計画に関連しアナデリ近郊から渡来したのではないかと考えていた。しかし、雁の里親友の会事務局長の池内俊雄氏により実情はそれよりも奥が深いものがあることが分かった。

これからの記述は、池内氏の貴重な調査で得られた事項を教えて頂いたものである。



調査中の池内氏

ガン類は越冬地で番形成すると、雌の繁殖地に飛んでいく傾向があると言う。池内氏が1993年にロシアのウランゲリ島に調査に行かれた時の記事として、ハクガンには顔の赤い個体と白い個体がおり当時の島には、顔の赤いハクガンが全体の96%を占めていたとのことであった。赤色顔のハクガンは、越冬地のバンクーバーに注ぐフレーザー川河口の土壌が鉄分を多く含んでいてそこに顔をつつこんで採食するため赤く染まってしまうためである。一方、北アメリカ東海岸で保護区のあるカリフォルニアで越冬する個体は顔が白く、一目で越冬地がどこであるのか判断でき



池内氏撮影ハクガンのペア

るのだそうだ。するとウランゲリ島のハクガンはバンクーバーが主な越冬地ということになる。一方、アオ

ハクガンは主に北アメリカ東部で繁殖している、番には同じアオハクガンを選ぶ傾向があるという。この年の島内の調査ではハクガン3万組に及ぶ番の内、元来この島にいないアオハクガンは4羽確認され、その内番形成が確認できたのは3羽であり、1万組分の1組の非常に珍しい組み合わせであると記されている。写真はそのとき撮影されたもので顔の白い雌のハクガンは1986年に標識され、翌年アオハクガンとペアになって戻ってからずっと番関係を継続している仲のいいペアであると言う。ウランゲリ島ではアオハクガンとハクガンのペアの場合必ずアオハクガンが雄で雌の顔は白いという。以上のことから今回渡来したアオハクガンは雄である可能性が高いと池内氏は考えておられる。

非常に興味をそそられる推察である。筆者なりに解釈すると。ウランゲリ島生まれの美人の雌がわざわざ遠いカリフォルニアに少数越冬しに行き、色男のアオハクガンを引っかけてウランゲリ島に戻ってきたペアであると言える。

渡来した要因

過去にはロシアのチュコト半島北極海沿岸にも繁殖していたハクガンが、ウランゲリ島に追いやられたものの、過密状態になった繁殖地と大陸部の人為的圧力の減少でまた大陸部でも繁殖を始めたことや、北アメリカの越冬地も過剰になりつつあり、アメリカでは狩猟鳥であるハクガンを保護区外へ追い出し狩猟されることがあることから越冬地が落ち着かないためアメリカへ渡らず日本に来るコハクチョウに付いてきてしまったのではないかと池内氏は推測しておられる。また、現在では環境も変化しており、温暖化により海岸線がどんどん後退し繁殖に適した低湿地が海に消えたところもあるそうで、北極海沿岸で繁殖する鳥たちに少なからず影響がある



池内氏撮影コハクチョウの繁殖地

ことも池内氏は指摘しておられる。

最後に

この冬日本に渡来したアオハクガンにとっては、カメラマンに追いかけられはしたものの、脅かされることもなく温かい目で見守られたはずで、番いの相手は見つからなかったとしても、また来年姿を見たいものである。来年の行き先は彼にしか分からないが、繁殖地で新しい相手を見つけて子供を連れてきてもらいたいと願っている。

本文をまとめるに当たり、貴重な資料提供を頂いた池内氏をはじめ、情報を頂いた諸先輩方に感謝いたします。

佐潟ラムサール条約登録 10 周年記念

「鳥がつなぐ潟と人」

ー佐潟 10 ラムサールフェスティバルー

平成 18 年 12 月 2 日（土）3 日（日）の 2 日間に渡り、新潟市佐潟ラムサール条約登録 10 周年を記念し、新潟市と野鳥の会など自然関係の団体による、「鳥がつなぐ潟と人」ー佐潟 10 ラムサールフェスティバルーが開催されました。本支部も実行委員及び事務局メンバーとして企画・運営に携わりました。1 日目は、新潟市万代市民会館において記念フォーラムが開催され、本会会長の柳生博氏から「鳥がつなぐ潟と人」と題しての基調講演や本支部副支部長（日本標識鳥協会新潟グループ）千葉晃氏は「佐潟における標識鳥調査結果」について、同じく本支部副支部長岡田成弘氏は「新潟平野に飛来・越冬するハクチョウ数調査結果」についてなどが発表されました。続いて福島潟をテーマに「潟の賢明な利用と私たちの未来」と題し、篠田新潟市長他によるパネルディスカッションも行なわれました。2 日目はウェルサンピア新潟に会場を移し、KODOMO ラムサールが開催され、全国のラムサール登録湿地にある小中学校の子供たちが集い、潟の保全やワイズユースについて発表と意見交換が行なわれました。多くの参加者とともに有意義な 2 日間を過ごすことができました。（事務局）

伐採を免れた野鳥の森（新潟市関屋海岸）

新潟市 伊藤 泰夫

新潟市関屋海岸のクロマツ林は防風防砂及び保健保安林として市民の貴重な財産であり、多様な野鳥の生息地及び渡りの中継地として重要である。平成 14 年、新潟市は都市計画道路建設のためこの森を伐採分断すると発表した。これに対し、ただちに地元住民を中心とする“関屋の松林を守る会”が結成され反対運動が始まった。主な運動の経緯はつぎのとおりである。“にいがた野鳥の会”から要望書の提出、現地観察会の開催、街頭などでの署名運動、本会本部及び支部からの要望書の提出と続き、平成 15 年には市長との面会が行われた。この後、市長提案に基づき中立な立場の第三者（NPO まちづくり学校）が仲介して一般市民参加による市民会議が設けられた。同会議は 6 回開かれ、討議の結果は平成 18 年市長に報告された。この間市民フォーラムも開かれ、本会の千葉副支部長がパネラーとして参加した。また、別件で来県中の柳生博会長からもこの問題について力強い発言をいただいた。

このような中、同年 11 月新潟市長は選挙に際し、「計画を見直し、松林は伐採せず保全に向けて積極的に取り組む。」と公約され、5 年にわたる運動によりやく一応の結論が出た。

今、関屋の森は春を迎えシジュウカラ、ヤマガラが元気に飛び回りキジも鳴き出した。北へ帰るマヒワ、アトリ、シメの姿も見られ賑やかだ。この平和な松林を今後も守っていくには当該都市計画路線の完全廃止が必要で、この課題はまだ私共に残されている。更に松林の保護育成に少しでも役立つよう、既に森の手入れなど素人でも出来るところからヴォランティア活動を開始している。これまでの多大なご支援に感謝し、なお一層のご協力をお願いする次第です。

韓国での驚きの探鳥

新潟市 尾身 秀雄

『圧巻！トモエガモの大群 冬の韓国』というチラシをもらってから何年になるだろう。いつか行ってみたいと思っていたことがこの2月やっと実現しました。20日～24日、天候に恵まれて快適な探鳥ツアーでした。その時の印象を二つ三つ書いてみます。

トモエガモの大群

何といっても50万羽ともいわれる錦江(クムガン)河口渡り鳥飛来地のトモエガモの大群です。錦江河口の土手から100m～150m位先に島と見紛うばかりの黒い横長の線が2本3本と見えます。望遠鏡で見るとトモエガモが盛んに動いています。午後6時前後になると少しずつ飛び立ちが始まりますが、列の先頭の方へ行くだけですぐ舞い降ります。それもよく見ていると列の後ろから前の方へ追い立てるようにして飛び立ちます。そして、こういう行動をしばらく続けているうちに、実際に大きな集団となって40m～50m位の高さに舞い上がり、そのまま餌場へ行くのかと見てみると、まだ多数の仲間が残っている水面に舞い降りてきます。こんな飛び立ちの行動を3～4回繰り返して、時刻にして午後6時40分前後の時間帯になると全部飛び立って、今度こそはそのまま餌場めがけて飛んでいきます。この先頭集団は一線を画すようにやや黒く見えたのも、きつとこの大集団にもリーダー格がいるに違いないと思えました。50万羽もの大集団が一つの塊になって左から右へ流れていきます。その正面を見ていて、左は既に視野一杯になったが、右の方は最早先が見えません。つまり人間の左右の視野を超えての長い列ができるのを想像してください。郡山(クンサン)のビジターセンターの観察指導者に昔からこのような現象が見られたのかと聞くと、「実はここ10数年のことだ。1991年に錦江河口堤が竣工し

て、海水の進入が防止されたことから、それまでであった水の流れが無くなって、その後このような現象が見られるようになった」ということでした。



トモエガモの大群

錦江河口堤の内側は川幅が500mもあり、毎年2月20日前後からトモエガモの大集結が始まり、3月上旬に最大になって北帰行に向かうのだそうです。2004年4月北海道宮島沼でのマガンの大集結64,000羽というのを見たことがあります、その10倍の規模というトモエガモの自然の営みに改めて感嘆させられました。

この土手の近くの田圃にサカツラガンがいるというので急遽そちらに移動しました。12羽いて、何を食べるのか判らないが盛んに田圃を歩き回って餌採りをしているように見えました。



サカツラガン

ずらり並んだクロハゲワシ

鉄原(チョロン)セムトン渡り鳥飛来地でクロハゲワシを見ることができました。ここ

はDMZ（非武装地帯）の中にあります。事前に許可を取って、この日、朝6時40分にはクロハゲワシの観察現場に入りました。DMZというのは南北境界線からそれぞれ2kmの範囲内のことで、現地住民は自由に耕作して生活しており、子弟の学校もあります。現地住民以外は許可を得て検問所を通らなければなりません。現場には大きな灌漑用水池があって、その堤防に11羽のクロハゲワシが1羽であったり2羽・3羽が一緒になったりして並んでいます。堤防の下は田圃が広がり、あちこちにタンチョウ・マナヅル・マガン・ヒシクイなどがいます。その一番手前がクロハゲワシの餌場になっており、牛や豚が皮を剥がれて丸ごと放置されており、いくつかの残骸があります。広い用水池は大半が氷結していますが、対岸近くで一部水面がでており、そこにサギやカモがいます。近くの林からはハシブトガラやシジュウカラの鳴き声が聞こえます。こんな環境がクロハゲワシの生息地でした。クロハゲワシを刺激しないように田圃道をゆっくり移動して彼らの正面に出て写真を撮ることができました。



クロハゲワシ

この鉄原でもう一つ貴重な観察ができました。近くにワシミミズクが営巣しているというので案内してもらいました。小さな川で対岸約30m先の岩棚に枯れ草のような物で巣を作りそこにうずくまっているのがよく見えます。

このDMZはまさしく野鳥の聖域で、カシラダカ・ミヤマホオジロ・ヤマヒバリなどが群がる中で、オオモズがその孤影を見せてくれて嬉しくなりました。



ワシミミズク

アカツクシガモなど

ソール北西部にある江華島（ガンファド）や群山とソールの中間点にある瑞山（ソサン）の浅水湾渡り鳥飛来地でも探鳥をしました。

江華島では何といたってもアカツクシガモ。前日400羽の集団がいたということでしたが、この日は23羽、飛ぶと橙赤褐色がきれいというがその通りです。ここでは群れをなして忙しく動くダルマエナガや地上を歩いて時々足を止めてくれるハチジョウツグミやノドグロツグミも忘れられません。

瑞山ではコウノトリが1羽いて、やや距離があったが観察できました。かなり大きな水辺があって、新潟でもよく見られるカイツブリやカモ類以外では、かなりの数のツクシガモがいてその白さが目立ちました。

その他

韓国の鳥相は日本とほとんど変わらないとツアー講師のN氏に教えられましたが、最後に今回出現して上記で触れなかった種のうち、新潟に馴染みがないか、あるいはあまり見ることもない種について次に挙げておきます。（ ）内はその場所と数を示します。

コウライキジ（群山・江華島各3）

ミヤコドリ（群山4）

ヤマゲラ（群山2・江華島1）

コホオアカ（群山数羽）

シベリアジュリン（群山数羽）

ツメナガホオジロ（江華島・瑞山各20-30）

ミヤマカケス（群山1）

今回期待されていて出なかったのはヘラサギだけです。暖冬のせいで北帰行が早まったのだということでした。内容の充実した探鳥ツアーだったと満足しております。

朝日池探鳥会

2006年11月23日



数百のガンの乱舞に大感激、大満足

寺泊探鳥会

2007年2月4日



探鳥会名物、激うま特製タラ汁で冷えた体がポカポカ



本日観察された鳥を確認し合う「鳥あわせ」風景



海は大荒れ、風がとても冷たかった



人気のハクガンと、いつものマガンやオオヒシクイ



寒い寒い寺泊港にて

発行	2007年3月30日	No.63
発行人	大島 基	編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃
事務局	日本野鳥の会新潟県支部 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号 TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002	